

審査員

遠藤 幹子 (office mikiko/ 一般社団法人マザー・アーキテクチュア)

小野田 泰明 (東北大学大学院工学研究科教授)

馬場 正尊 (オープン・エー/ 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授)

藤原 徹平 (フジワラテッペイアーキテクトラボ/NPO 法人ドリフターズインターナショナル/ 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

メッセー ジ

遠藤 幹子

(office mikiko/ 一般社団法人マザー・アーキテクチュア)

これからの建築士賞の第一回受賞者として、今年度も引き続き審査員をさせて頂くことになりました。

これまで、子育て建築の仕事と両立しながら、コミュニティをエンパワーするような参加型の建築プロセスや、子どもの生育環境に特化した場のデザインを続けてきましたが、なかなかそれが建築論壇のメインストリームに乗らないため、ある意味一人で孤独に戦ってきたような日々でした。この賞を頂いたことで「このまま思ったとおり、自分にしかできない領域を開拓してゆけばいいんだ」と強く背中を押してもらえた気がします。皆さんもお気づきのように、時代の変化にともない建築士という職能も姿を変えざるを得ない時代が来ています。建築士の一人一人がもっと広い視野で社会を見つめ、社会と共に生きながら、より良い未来を築くためにどんな新しい動きを始めるべきなのか？、真剣に考える時代なのだと思います。ですので、建築のバックグラウンドを活かしながら、何か未来への強い信念を持って「まだ名前のついていない仕事」を果敢に開拓している方々を応援したいと思います。何人かの方に推薦されてようやく私も応募しようと思えたので、「まさか自分が建築の賞に応募するなんて」と思う方にこそ応募頂きたいですし、そういう方が周りにいらしたら、皆様にどんどん推薦して頂きたいと思います。楽しみにお待ちしております。

小野田 泰明

(東北大学大学院工学研究科教授)

建築は、実現までに比較的長い時間を必要とする。そのため、企画・設計の時の空気感と完成した時の環境が大きく変化することは日常でもある。特に、復興のような目まぐるしく変わる場所においては、こうした問題構造が極端な形で顕在化する。発災直後、災害公営住宅を早く沢山作れと云って凶暴に圧力をかけてきた同じ人たちが、十分に考える時間を与えられずに建てられてしまったかわいそうな住宅群を容赦なく、本当に容赦なく断罪するといった、野蛮が常態化している。一方で建築は、人の生活や営みに寄り添うものであり、「空間」を実際に構築する作業は、こうした絶望的な状況を調停し、様々な人々が出会い、遠くの人にその重要性を伝える大きな力でもある。しかしながら、こうした絶望と希望の相反を止揚するにはどうすればいいんだろう。被災地に7年間いてだんだん分かってきたことは、自分の他を変えようと大上段に振りかぶるのではなく、建築に関わる専門家自身が在り様を変化させること。注文を待っているのではなく、社会に直接介入して、環境を変え、人と人との関係をゆるやかに変えていくこと。その方が、大きな力になるし、何よりも楽しいという、当たり前のことだった。「これからの建築士賞」が、待っているのは、多分そうした未来のありかたなんだと思う。色々な未来を見ることが今から楽しみだ。

馬場 正尊

(オープン・エー/ 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授)

工作的建築へ。

かつて物事も建築も計画通りにつくられていた時代、設計と施工は分離されていた。かつて土地の値段がどんどん上昇している頃、やはり建築と不動産は分離した概念だった。物理的にはつながっているにもかかわらず、でも今、それらの境界はどんどん曖昧になっていると思う。建築家が自ら施工もするし、不動産を含めた事業計画からプロジェクトを立ち上げることだってある。時代が求めているスタンスだと思うし、越境しないことには新しい表現も見つからないような気がする。プリツカー賞を獲得したアナベラの建築は、最終的な建築生成を住み手の参加にゆだねてしまっている。ターナー賞を受賞したアッセンブルも、家が作られるプロセス自体が作品の対象である。これらが美しいのはオブジェではなくプロセス。これらの空間は計画的につくられたものではなく、まるで建築を工作しているかのようだ。建築が出来上がるプロセスのパラダイムシフトは、既に行われているのかもしれない。新しい文学を表現したいなら、新しい文体が必要だ。と言ったのはヘミングウェイだったのだろうか。新しい建築を表現したいなら、やはり新しい手法、プロセスが必要だと思う。僕は、「大文字の建築」から逸脱するように、躊躇なく領域を横断して仕事をしてきた。なりふり構わず時代や状況に応えようとして、結果そうなっている。でもその先に、新しい建築のでき方や形が存在しているんじゃないかと信じるようにしている。新しい時代の、新しい文体で描かれたような建築の姿を、このコンペで感じたい。

藤原 徹平

(フジワラテッペイアーキテクトラボ/NPO 法人ドリフターズインターナショナル/ 横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授)

私が学生のころ(1990年代の後半)、「将来建築の設計の仕事なんてなくなるぞ」とオトナたちに散々脅されたが、なんのことはない今はむしろ設計業界全体は未曾有の人材不足のようだ。(知り合いの建築家たちは揃いも揃っていつも社員募集中である)。確かに新築の数は減ってるかもしれないが、リノベーション、コンバージョン、保存修復、まちづくり、地域ブランディング、建築に関わる仕事のニーズは高まる一方だ。最近はその幅広い実践に伴い建築理論も変わっていく機運を感じる。オトナたちは「将来は建築の設計は、仕事の意味が変わるぞ、領域も拡張する。何をつくるのかから、どうつくるのか、どうつかうのか？建築に関わる人間がやるべきことは山積みになるぞ！」と言うべきだったかもしれない。粘り強く仕事に向き合い、人と歴史を尊重し、数字にも法律にも強い、体力も知力もある建築士というプロフェッショナルがカバーしなければならない領域は広がる一方だ。この賞によって、建築を創造的に展開する人たちが勇気付けられ、未来の社会に向けた変革が加速することを強く期待しています。